“Lucretia Smith’s Soldier” から “The Private History of a Campaign That Failed” へ
―小説家 Mark Twain の誕生へ―

木 村 仁 美

1861年に南北戦争がはじまると、蒸気船によるミシシッピ川の交通は難しくなり、水先案内人をしていたサミュエル・クレメンズは失業する。故郷ミズーリ州に戻ったクレメンズは幼馴染たちと南軍の義勇兵となり小隊を結成するが2週間で脱退している。この間のことは、それから24年後に小説化された、「失敗した戦いの私記」“The Private History of a Campaign That Failed” に描かれる。クレメンズが奴隷制度をめぐって衝突した南北の問題をどのように考えていたのか、積極的な発言はあまりないようである。しかし、「失敗した戦いの私記」はユーモアをまじえながらも戦争批判の色濃い作品である。マーク・トウェインの南北戦争を題材にした作品は少ないが、小説家としての駆け出し時代に実はこの「失敗した戦いの私記」の原型とも言える小品が書かれている。

クレメンズは、義勇兵を辞めた後、ネヴァダ準州の長官 (Secretary) に任じられた兄オリオンに同行する。この地のいくつもの鉱山町で彼は金銀探しに夢中になるが結局大損をし、経験もあることから新聞に記事を書いて生計を立て始める。ネヴァダの小さな町における新聞では、読者も記者もお互いをよく知っている。このような条件のもとでクレメンズは教養のない読者の期待に沿って記事を書いた。それは身近な人物をこきおろして笑いものにするという手法である。この方法はホークス(人かつぎ) (hoax) と言われる手法の一種で、この頃使い始めたマーク・トウェインというペンネームでも徐々に人気を得てくる。

鉱山に対する執着心も失せて、ネヴァダを去らなければならない事態が発

生すると、1864年、それまで何度か訪れたこともあり、記事も掲載されたことのあったサンフランシスコの新聞社で働くようになる。サンフランシスコの新聞では知っている人物を題材にとりあげて笑いをとっていればよかったネヴァダ時代とは違う。題材収集にも苦労し、社風と合わず止めてしまった。トウェインは金銭的にも貧窮する。ジョン・ローバーによれば、この頃、月300ドル[1]で、北部連邦軍からミシシッピ川の水先案内人の契約依頼があり、その仕事を引き受けたが、ジョン・マッキャム[2]の助言で文筆の世界にとどまったと言われている(Lauber 143)。トウェインが戦中のミシシッピ川に戻ることはなかった。やがて彼は、文芸週刊紙『カルフォルニアン』に、一篇の記事につき12ドルで、10のスケッチを書くことになる。彼はこの「新しい、文芸性のある新聞」『カルフォルニアン』を気に入り、「上流社会に流通している合衆国で最も優れた文芸性のある週刊新聞です」(*Letters* 1: 312) と家族宛の手紙でも言及している。この週刊紙に掲載されたスケッチの一つが「ルクレシア・スミスの兵士」"Lucretia Smith's Soldier" であり、「失敗した戦いの私記」でなされる戦争批判の下地であると考えられる。またこれはトウェインの創作方法がおぼろげながら出来上がった作品であるとも言える。本稿では戦争批判がトウェインの小説の書き方といかに結びついているか、「ルクレシア・スミスの兵士」と「失敗した戦いの私記」とを比較して考察しようと思う。

1.

「ルクレシア・スミスの兵士」は当時人気のあったセンチメンタルな戦争物語のパロディである。前置きにある「著者の覚書」(Notes From the Author)で、トウェインは、出だしから皮肉たっぷりに、「わたしはハーパーズ・ウィークリーに載っているすばらしく気分の悪くなるような戦争物語の熱烈なファンである」と書いている。彼の言うこの「すばらしく気分の悪くなるような戦争物語」(nice, sickly war stories) ("Lucrectia" 128) の例を挙げるとすれば、1863年1月3日付けの『ハーパーズ・ウィークリー』に掲

載された「捕虜の交換」"An Exchange of Prisoners" という小品が適当であろう。これは、3人の男女がそれぞれ恋人、兄弟、国のために自己を捧げようとする戦争美談である。

レティは「若者はみな入隊すべきである」という信念を持った女性である。彼女は、自分を熱愛するマーシーに、既に入隊している彼の弟を見習って兵士になれと言う。星条旗のためにマーシーを入隊させることができるなら、彼女はどんな犠牲でも払うのにと言う。そこでマーシーは交換条件としてレティと結婚の約束をとりつける。彼は弟ウォルターがレティと相思相愛であることを知らない。レティは国のために正しいことをしたのだと考え、ウォルターをあきらめるのであった。戦場で、マーシーは、レティに手紙を書いている。彼がウォルターにレティとの婚約を告げると、ウォルターは頭をうなだれる。弟の姿を見たマーシーは、ウォルターがレティを愛しており、国のために彼女への愛情を犠牲にしたのだと考える。兄弟が帰還した時、ウォルターは生命の危険はなかったが額に傷を負っていた。それは彼が勇敢に戦ったしるしである。マーシーは、立派に成長した弟に恋人を任せると再び戦地に赴き、二度と姿を見せることはない。マーシーがレティに書き残した手紙には「一つ目の戦いは君のために闘った。これからはわが国のために戦っていこう」と綴られている。

これがセンチメンタルな戦争美談であると言えるのは、3人が国のために命をかけようとした結果、最後まで戦争は美化され、男女はそれぞれが有終の美を飾った形になっているからである。恋人をあきらめてまでマーシーに入隊する気を起させたレティは「兵士が銃弾に倒れると苦しみは終わるけれどわたしの苦しみは永遠だ」と嘆きながら、最終的には本当の恋人といっしょになることができている。一方、兄のために一度はレティをあきらめたウォルターだが栄光の勲章である傷を額に負って帰還すると、レティといっしょになることができた。そして何よりもマーシーの恋人に向けられた心は兄弟愛ゆえの失恋を契機に、国のために再び闘うという心意気に変化した。これはマーシーの入隊動機が、利己的なものから美しい高貴な愛国心に変化し

たことを意味する。マーシーの胸の内に生まれた愛国心は、レティとウォルターに幸福をもたらし、国にとっては最も名誉なことであるとして描かれているのだ。

これに対し、トウェインの「ルクレシア・スミスの兵士」に登場する若者たちは自らの願望ばかりにこだわり、あげくの果てには戦争の結果起きる悲惨な現実を見せつけられることになる。ルクレシア・スミスは兵士の恋人となって武勲のおこぼれにあずかりたいと願う女性である。

ある日、ルクレシアの恋人であるレジナルドは、ルクレシアが望んだとおり軍隊に志願する意志を告げにくる。彼女が彼の決意に感動してくれるだろうというレジナルドの期待とは外れ、ルクレシアは彼が入隊する気がないのだと早とちりして彼の話も聞かないまま追い返す。レジナルドは悲嘆にくれるが、次の日ルクレシアには黙って入隊してしまう。ルクレシアは自分の誤解に気がつくと、「栄えある戦場」で自分のことを思い出して胸を痛めてくれる恋人を逃してしまったと思い、悲しむ。手紙も来ず、彼女は、自分の早合点を後悔して、レジナルドの安否に心を痛める。きれぎれの消息しかない。彼は絶望のあまり何かに憑かれたように戦っているらしい。彼女は戦争と虐殺の記事であふれかえる新聞を読んでは涙をながす。記事には戦争の悲惨さがあふれていた。何週間かすぎて、ついにルクレシアは長い負傷者リストのなかにレジナルドのイニシャルを見つけ気絶する。

その負傷兵はあごを打ち抜かれて包帯だらけになってワシントンの病院のベッドに横たわっている。しゃべることも出来ず、素顔も見えない。しかし彼のそばにはうれしそうな表情をしたルクレシアの姿があった。彼女はこの負傷兵を一生懸命に看病する。彼がよくなれば、彼女の献身に報いる以上の感謝のことばを聞くことができるだろうと楽しみにしていたのだ。ついに兵士の包帯が外された日、なんとそれは彼女の恋人レジナルドと同じイニシャルを持つ別の兵士だった。そして彼には故郷ウィスコンシンに残してきた恋人がいた。ルクレシアは思わず悪態をついてくやしがるが、当のレジナルドはその後も帰ってくることはなかった。

恋人たちがロマンティックな想像に基づいて戦争に行くことを望むというはじまりは「捕虜の交換」と同じである。ところが「ルクレシア・スミスの兵士」の場合、ルクレシアとレジナルドの利己的な目的が衝突して、誤解をしたまま物語が進んでいく。どこまでも空想を追いかけるルクレシアは戦争の現実を突きつけられると人前をはばからず本音をもらす。この思いがけない展開からもわかるように、「ルクレシア・スミスの兵士」は、センチメンタルな戦争物語を批判するだけではなく、アイロニックな笑いと愚かな若者たちに哀れみを誘う作品になっている。その特徴は、ルクレシアに同情しているようでありながら冷めた語りでつき離している語り手と、思わず本音を暴露して興奮するルクレシアとの間に距離が生じている点である。

例えば、レジナルドは普段実直に店員の仕事をしている青年であるが、ルクレシアが自分に対して描いている勇敢な兵士像に、今日こそは応えることができると思い、小さな部屋の片隅にある樽の上に座って想像をふくらませている。

> He pictured himself in all manner of warlike situations; the hero of a thousand extraordinary adventures; ... and beheld himself, finally, returning to his old home, a bronzed and scarred Brigadier-General, to cast his honors and his matured and perfect love at the feet of his Lucretia Borgia Smith. ("Lucretia" 129)

これに対して、レジナルドが入隊してくれないと思いこみ、ものすごい剣幕で怒るルクレシアの姿は、レジナルドの想像が一途な愛情によって勝手に進んでいったものであったことを強調する。

> "Don't I love my Reginald any more? No, I don't love my Reginald any more! Go back to your pitiful junk shop and grab your pitiful yard-stick, and stuff cotton in your ears so that you can't hear your country shout to you to fall in and shoulder arms! Go!" ("Lucretia" 130)

ルクレシアの短気が二人の行き違いの原因であることは読者が容易に気付く

ことだが、レジナルドは恋人に嫌われてしまったと誤解をし、失恋の痛手とともに戦場へ赴くことになる。この時のレジナルドの心境を語り手は、彼が「もはや自分が柔弱な店員ではないことを思い出すと、武人としての心が慈悲に訴えることを軽蔑した」ためである、とさも気の毒そうに説明している。しかし実は、二人のセンチメタルな戦争についての空想にともなう個人的動機の違いよって意志疎通に大きなずれが生じてしまっていることを、語り手はアイロニカルに指摘しているのである。

もう一つのアイロニックな笑いが見られる例は、負傷した帰還兵を世話する場面である。ルクレシアは、レジナルドに対する自分の行為を反省していた。その代償に負傷兵の看病をしているつもりである。しかし彼女は報酬を求めていることが読者には読みとれる。

> [S]he stood to her post bravely and without a murmur, feeling that when he did get well again she would hear that which would more than reward her for all her devotion. (“Lucretia” 132)

負傷兵がレジナルドだと思っているからルクレシアは必死である。彼女自身には取引をしているつもりはない。だからこそ人違いをしていたことに気がつくと思わず大きな声で悪態をついてしまう。

> “O confound my cats if I haven’t gone and fooled away three mortal weeks here, snuffling and slobbering over the wrong soldier!” (“Lucretia” 133)

これに対して語り手はいかにも教訓めいた解説をしている。「それは全く悲しい真実だった。人生とはこういうものだ。つまりわれわれにはへびのとおった跡がついている（運命は悪魔に決められている）のだ」(It was a sad, sad truth.... Such is life, and the trail of the serpent is over us all. [“Lucretia” 133])。語り手は、事の重大さを嘆いているようだがセンチメンタルな若者たちの姿を冷静に見てすましているのである。

「ルクレシア・スミスの兵士」の語り手は、進んで戦争に身を捧げる若者たちを賞賛している「捕虜の交換」の語り手とは正反対の立場にいる。ルクレシアは自分のわがままでレジナルドを戦場に追いやった。レジナルドはセンチメンタルな思い込みで自縄自縛となる。彼らの運命は戦争に対する彼らの思い込みというへびのわなによって左右されていた。「ルクレシア・スミスの兵士」の語り手は幻想に動かされていることに気がつかない恋人たちを笑い、また読者の賛同を得ようとした戦争美談を批判しているのである。

しかし、センチメンタルな若者たちの愚かさが明らかになることで生まれる笑いだけでは、充分に戦争の現実を鋭く指摘しているとは言い難い。レジナルドと同じイニシャルだった負傷兵の快復の見込みがないほどの傷の程度(desperately wounded ["Lucretia" 132]) を考えると、「捕虜の交換」のウォルターと比べ、戦争の悲惨さを正確に伝えていると言えるだろう。ウォルターの額の傷は英雄のシンボルとなっているが、この負傷兵の姿は生死をさまよう人間にとって、英雄であることは何の役にも立たないことを物語る。同時に負傷兵の姿そのものが戦争批判であるというのであれば、彼が包帯で顔中を覆われていることは真実を隠す戦争の実態を象徴的に暗示してもいる。あごを撃ち抜かれて声が出せないことは、戦争の悲惨さを語れないように口をふさがれていると考えることができるだろう。しかし作者＝語り手はレジナルドとイニシャルが同じだった負傷兵の姿について特に解説することはない。ルクレシアはレジナルドが自分のために自虐的になっていることを知ると後悔している。彼のことをとても心配するが、まだ現実に直面しきれないので戦争と虐殺に関する記事を最後まで読みとおすことができない。気絶しながらも負傷兵をうれしそうに看病するという彼女の姿には、後悔の中に再び英雄にかしずく謙虚な恋人になって償いができる、という淡い期待が表されている。そんな時、負傷兵の正体がルクレシアのエゴイズムをこっぱみじんに打ち砕く。負傷兵をレジナルドと間違えたことに気がつくと、現実はルクレシアを中心に動いているのではないことを彼女は思いしらされるのである。負傷兵の姿は戦場の厳しさにあふれているが、物語はルクレシアが戦争

の現実に目覚めていくことをより重要な関心事としている。したがって負傷兵はルクレシアの目を覚ませる存在にすぎない。このことはトウェインが名誉欲にとりつかれた愚かな若者たちを嘲笑することはできても、戦争そのものへの批判をする方法は未だ模索していたことの表れであると言えるだろう。

「ルクレシア・スミスの兵士」を発表してから後トウェインの作品で南北戦争を題材にしたものはほとんどない。『ハックルベリー・フィンの冒険』がアメリカ合衆国で出版された1885年に、「失敗した戦いの私記」が『センチュリー・マガジン』*Century Magazine* に掲載された。それまでの年月、トウェインは南部と北部の抱える問題をさまざまな方法で物語の中に組み込んだ。それは常にユーモアを基調とした一癖ある表現で読む者の意表をつく。それが「失敗した戦いの私記」で再び南北戦争自体がモチーフにとりあげられると、今度は笑いによる風刺だけではなくはっきりとした戦争批判がみてとれるようになる。「ルクレシア・スミスの兵士」でみられたような名誉欲にとらわれた娘、その女性の心を射止めようと願う若者を嘲笑するだけではなく、語り手の「わたし」が間違いを起した時の疑念と後悔がリアルに描かれているのだ。そこではまた小説家マーク・トウェインが、まだ「マーク・トウェイン」として脚光を浴びていなかったクレメンズの創作方法の未熟さを指摘しているかのようでもある。「失敗した戦いの私記」は「ルクレシア・スミスの兵士」からどのように発展したと言えるのだろうか。以下、両者に見られる類似点と「失敗した戦いの私記」が「ルクレシア・スミスの兵士」ではあいまいであった戦争批判の補強となっている部分を中心に考える。

2.

「失敗した戦いの私記」は、「ルクレシア・スミスの兵士」と同様、南北戦争という深刻な背景をもちながら、にやりと笑わざるを得ない滑稽な物語になっている。語り手である「わたし」はミシシッピ川で水先案内人をしていた。南北戦争が勃発すると「わたし」は故郷ミズーリ州に戻り、幼馴染たちと南軍の義勇兵を結成する。義勇軍の名前は故郷マリオン郡にちなんで「マ

リオン・レンジャーズ」Marion Rangers と名付けられる。「わたし」と仲間たちは兵士になったことを誇りに感じ、まるで「ピクニックのような楽しさ」で北軍の襲撃に備えている。ところがある日、誤って、見知らぬ武装もしていない男を敵と間違え射殺してしまう。「わたし」と数人の兵士たちは戦争が「個人的な敵意は何も持っていない見知らぬ人間を殺すこと」(the killing of strangers against whom you feel no personal animosity; ... ["Campaign" 278-79]) だということを悟り、マリオン・レンジャーズを2週間で脱退する。

この重たい戦争のモチーフが楽しい物語となっているのは、マリオン・レンジャーズが真剣に従軍しているつもりであるにも拘わらず、必ず仲間同士のけんかへと展開するため、戦争という事態の緊迫感がゆるんでいるからだと言える。語り手の「わたし」と24年前の「わたし」との間に生じる距離もまた若者たちの失敗を誇張しやすくしているであろう。これは「ルクレシア・スミスの兵士」で使われた手法 —ルクレシアに同情しているようでありながら冷めた語りでつき離している語り手と、思わず本音を暴露して興奮するルクレシアとの間にある距離によって皮肉な笑いが生まれる— と共通する点である。

例えば、とうもろこし倉庫を寝床にしているマリオン・レンジャーズのキャンプ生活は、戦争に対する若者たちの幼稚な認識をあらわしていると言える。兵士たちは「たいていわんさといるねずみのせいで朝までけんかをするのが常だった」。

> [Full of rats] would bite some one's toe, and the person who owned the toe would ... begin to throw corn in the dark. The ears were half as heavy as bricks, and when they struck they hurt. The person struck would respond, and inside of five minutes every man would be locked in a death-grip with his neighbor. There was a grievous deal of blood shed in the corn-crib, but this was all that was spilt while I was in the war. ("Campaign" 275)

けんかの原因がねずみであることは明らかである。けれども若者たちは瞬く間になぜ騒いでいるのかわからなくなっているに違いない。やがて子どもじみた感情のぶつけ合いは腕力の競い合いへと発展していくのだろう。語り手の「わたし」が、「とうもろこしの穂軸にぶつかって流した血が戦時中に流した血の全てだった」と言う時、読者は戦争の実体がマリオン・レンジャーズのけんかと同じようなものとして捉えられていることに気付かされる。とうもろこしの倉庫の場面は、マリオン・レンジャーズが一人でやってきた武装もしていない男を射殺してしまう直前の出来事である。後半にみられる語り手の「わたし」の述懐には、前半に漂っていたどこかのどかな雰囲気とはうってかわった落差がみられる。それは戦争の真似ごとをしただけでとんでもないことになる後半の事件がクライマックスを迎える前に、語り手の「わたし」が24年前の「わたし」を自己弁護しているためだと言うこともできよう。しかし語り手の「わたし」と24年前の「わたし」との距離が、若き「わたし」の無垢(イノセンス)ぶりを強調する効果となって、笑いを生み出していることは否定できない。物語を前後に分けるとすれば、前半部分において、語り手の「わたし」はまだ愚鈍な若者たちをあざ笑っているだけにとどまっている。

「失敗した戦いの私記」は語り手である「わたし」の過去の自分の姿を笑いものにしながら、その実、裏を返せば、戦争への批判がこめられている作品だといえる。J・スタンレー・マッツソンは、戦争記事の連載を計画していた『センチュリー・マガジン』が「失敗した戦いの私記」を掲載したのは驚くべきことで、トウェインの意図した戦争批判が理解されていれば取り上げられなかったもしれない、という主旨のことを述べている。(Mattson 437) 確かに戦争批判というメッセージがありながら笑いの要素が目立ちすぎている。しかし、あえて相反する調子を対照させることで、戦争の現実を悟らせる後半部に向けて読者の注意を促していると言えるだろう。

まず、トウェインが劇的に表現しようとしたのは「戦争と人間との間にある基本的な不和の存在」であるとマッツソンは言う。トウェインは兵士たち

が愚かであるということを指摘しているだけではない。兵士たちは人間が本来持っているべき「理性の指図」("dictates of reason" [Mattson 433]) と矛盾する状況に巻き込まれているのであり、そのことに気がついた語り手の「わたし」は自らを冷笑するしかないのである。このことはマリオン・レンジャーズが自然や動物を相手に惨めな姿をさらすことになる状況で示される。

例えば、マリオン・レンジャーズは「町の人間だったので乗馬ができなかった」("Campaign" 263) と説明される時、彼らは間違った役目に従事していることをらばの態度で象徴的に指摘されるのである。

> The creature that fell to my share was a very small mule, and yet so quick and active that it could throw me without difficulty; and it did this whenever I got on it. Then it would bray — stretching its neck out, laying its ears back, and spreading its jaws till you could see down to its works. ("Campaign" 263)

過去の「わたし」は、乗馬を簡単に考えていた。そして「簡単な乗馬」を必須とする兵士は「わたし」にとって華やかなイメージを持ったものでしかなかった。浅はかな過去の「わたし」はらばにばかにされても仕方がないのだ。しかしのどの奥まで見えるような大口を開けているらばの姿はそれだけでおかしい。

また、マリオン・レンジャーズは自然を相手に奮闘しなければいけない。敵がいつ来るかもわからなかったために、彼らは銃と弾薬だけを持って山道に入る。最善の安全策をとったつもりであった。しかし暗闇の中では思うように動くことができず、誰かが火薬のたるにつまずくと、前の誰かにぶつかり、ついには泥と持っていた武器と火薬のたるとがひとかたまりになって丘を転げ落ちる。

> ... each that was undermost pulling the hair and scratching and biting those that were on top of him; and those that were being scratched and bitten scratching and biting the rest in their turn, and all saying they

> would die before they would ever go to war again if they ever got out of this brook this time,... (“Campaign” 267)

そして結局火薬のたるも銃もなくしてしまう。武器は何の役にも立たなかったばかりか足手まといとなり、自らの無力さを思い知らされるのである。しかしここでも、若者たちが目に見えない恐怖を相手にどたばたする姿は滑稽に描かれている。乗馬の場面と同様、脅威の感情が仲間に飛び火していくにつれてことの発端がわからなくなり大騒ぎをするパターンである。前半部分はこのような同じパターンが次から次に何度も繰り返される。彼らは、敵陣を襲撃するつもりで入った農家の犬に襲われたり、北軍が来るというので峡谷に避難したが雨と強風と雷に出会ったりする(“Campaign” 270)。彼らが本物の戦争を経験する前にすっかり意気消沈してしまうのとは反対に、これでもか、これでもかと嘲笑される彼らを読者は面白がるのである。

このように、どうしようもないマリオン・レンジャーズの姿は、真剣に戦争に参加しているつもりでいる若者たちの心意気との間に落差ができるため、読者の笑いを誘う。これは、「大衆の無知」(Mattson 432) によって戦争が肯定されていくことを言わんとするための誇張である。語り手の「わたし」は、24年前の「わたし」を自己弁護しているだけでも、大義を掲げて組織したと思いこんでいるマリオン・レンジャーズを単に笑いとばしているだけでもない。マッツソンが、トウェインの描く戦争は「人類に押し付けられた笑劇(ファルス) だ」(Mattson 433) と言っているように、語り手の「わたし」は、無知ゆえに自滅に向かっているマリオン・レンジャーズを笑うことで、読者の覚醒を促しているのである。

アイデンティティの喪失が、戦争によって人間が堕落してゆく状態の第一過程であることは注目に値する。「ルクレシア・スミスの兵士」の場合、アイデンティティの喪失が戦争によって受ける被害であることは、レジナルドとイニシャルの同じ負傷兵の入れ替えによってぼんやりと表されていた。「失敗した戦いの私記」では、メイソンズ・ファームで世話になるマリオン・レン

ジャーズと仕事をする農夫の家族の姿をとおして、「戦争と停滞」war and stasis、「平和と生産力」 peace and productivity (Mattson 434) の相互関係の成り立ちを見ることができる。

マリオン・レンジャーズの若者たちは地位に対してこだわりを持っている。ダンラップは、スミスという姓と同じぐらい平凡な名前であることを嫌い Dunlap から d'Unlap につづりを変える ("Campaign" 257) が、以前と同じように前にアクセントを置いて呼ばれることに我慢できない。そこで今度は前から後ろにアクセントがくるように d'Unlap から d'Un Lap に変えたところうまくその呼び名が浸透した。ついでに彼は威厳のある意味を持たせようとして「フランスの年代記によると Lap は Pierre、d' は of、un は a を表すので son of a Peter」つまり「ピーター家の息子」という意味になると説明する。仲間たちは意味もわからず Peterson Dunlap と呼ぶようになるが、ダンラップは満足である。

またマリオン・レンジャーズにおける階級や役職もいいかげんである。「わたし」は second lieutenant ("Campaign" 257) に選ばれる。ジョー・ボワーズは sergeant で、エド・スティーヴンスは corporal ("Campaign" 259) であるが、どちらが上位かわからないため captain のライマンが同等の地位であることに決めた ("Campaign" 265)。誰も軍事経験がないのにこのようにそれぞれが名前や階級に縛られているため、日常の生活に必要な仕事をするのに自分にはふさわしくないとそれぞれが思っている。誰も馬にえさをやる気がしないし、お腹がすいて耐えられなくなったその時に始めて焚き木を集めて火を起す。

これに対して農夫の家族は寡黙に働き、疲れきった若者たちにたっぷりとした量と品揃えに富んだミズーリ式の朝食 ("Campaign" 271) でもてなしている。無気力に陥るマリオン・レンジャーズの耳に糸紡ぎの悲しげな音は未来の絶望を暗示しているようだが、読者は労働そのものに生の重みを感じることができる。

> There was nothing to do, nothing to think about; there was no interest in life. The male part of the household were away in the fields all day, the women were busy and out of our sight; there was no sound but the plaintive wailing of a spinning-wheel, forever moaning out from some distant room ... (“Campaign” 271-72)

マリオン・レンジャーズの無計画な動きは、軍隊の階級制度と一般市民の社会構造との間のずれも示している。彼らが肩書きにこだわることでアイデンティティを喪失することは見てきたとおりである。実際の軍隊組織は明確な序列によって秩序が保たれる。それは軍隊が個人個人のアイデンティティを築いていく場ではなく、戦闘に備えた一つのかたまりであることを意味する。一方マリオン・レンジャーズは軍事経験のないメンバーで構成されていた。もともと上下の序列が欠如している者たちの集まりである。その上に見栄が加わって彼らは自分の都合で勝手に行動する。役職についたばかりにますます統制がとれなくなっている。アイデンティティの喪失は思考力を低下させ自尊心の崩壊へと至るのだ。

マリオン・レンジャーズの気持ちの浮き沈みは激しい。まず彼らは、メイソンズ・ファームで何もすることがなく無気力になる。そこへ再び敵が近づいてきたという知らせを受けると「昔からの武人の魂」(the old warrior spirit [“Campaign” 272]) が再び目を覚ます。しかし繰り返されるデマに慣れてしまい、唯一の関心事だった敵の動向にさえやがて無関心になっていく。この段階ではまだおおげさな語り手の表現によって若者たちのまぬけさが笑いを誘う。しかし見知らぬ男を射殺してから入り混じる感情は深刻である。

見知らぬ男を誤って射殺してしまうクライマックスで、トウェインは24年前の「わたし」の虚栄と後悔、語り手の「わたし」の弁明を巧みに交えて、「ルクレシア・スミスの兵士」ではあいまいであった戦争のもたらす現実を明らかにする。

「わたし」が見知らぬ男を射殺して最初に感じたことは「驚くほどの満足感」(“Campaign” 277) であった。次に血にまみれた男を目の当たりにして自

分が殺人者だと思う。そして男がとがめるような目をマリオン・レンジャーズたちに向けて家族のことをつぶやいているのを見ると、後悔の念にさいなまれる。そこへ語り手の「わたし」が「彼は公平に正当な戦争において殺された」("Campaign" 278) と解説を差し挟む。そして、「しかし彼は反対勢力からまるで兄弟のように心から悲しまれた」と付け加える。混乱した「わたし」の気持ちに合わせて冷静である語り手の「わたし」が代弁しているのである。だが、同時に語り手の「わたし」は、当時の「わたし」の銃の腕前から考えると自分の弾が男に命中しているとは思えないので、潔白だとも言う。銃を撃った者が他に5人いるので罪が分散されると考えればいくらか重荷に感じることが少なくなるというのである。分別のある語り手の「わたし」は、誰の弾が当たったのかは問題ではないことが当然わかっている。したがって、この自己弁明は「わたし」本人の本音となるのでここではアイロニーとはならず、現在でも過去の「わたし」の過ちに苦しむ語り手の「わたし」の気持ちをリアルに表現しているのである。過去と現在の「わたし」が錯綜する語りは自尊心崩壊の危機に立った「わたし」の行動を説明する。

> I was not rightly equipped for this awful business; that war was intended for men, and I for a child's nurse. I resolved to retire from this avocation of sham soldiership while I could save some remnant of my self-respect. ("Campaign" 279)

実際に南軍に所属した当時のクレメンズは2週間の軍職から退くと、まるで逃げるように西部へ移動している。そして戦時中も軍隊とは無関係の生活を送り文才を発揮していくので、南北戦争は彼の文筆業とはかけ離れていると考えられるかもしれない。しかし時を隔てて「失敗した戦いの私記」のような戦争のモチーフを扱った作品を見る時、トウェインは過去の苦い経験を無駄にしてはいなかったことがわかる。南北戦争における夢想的な英雄崇拝は彼にとって恰好の批判対象となった。またトウェインは批判的な笑いの対象をあえて自分に向けている。身近なよく知っている人物を笑いものにすると

いう得意のテクニックは自己を見つめることに役立っているのだ。

トウェインの小説作法にみられる特徴が、実際の状況と登場人物の行き過ぎた想像とのずれをリアリスティックに描くことによって笑いを生み出し、実はその事実の裏に潜む真実を鋭く指摘する点であるとすれば、「失敗した戦いの私記」は南北戦争に限らず人間の誰もが秘めている醜悪な部分を笑いによってさらけ出し、その避け難い真実を読者に認識させようとした苦心作だと言える。アルバート・B・ペインは、誤って男を撃ち殺す場面が、「本当の戦争の恐怖を示すために創作されたのではあるが、このバーレスクの戦いには不釣合いだ」(*Biography* 169) と言っている。しかし、「ルクレシア・スミスの兵士」において、あごを打ち抜かれてしゃべることができなかった負傷兵の姿が、戦争批判のあり方を模索しているトウェインの思考過程を示しているとすれば、「失敗した戦いの私記」は、戦争の真似事をしただけでそれまでの珍道中を災難に一変させる戦争の実体を糾弾することに成功していると言えないだろうか。こう考えると1864年西部の地で新聞記者をしていたトウェインの「ルクレシア・スミスの兵士」は、小説家マーク・トウェインを作り上げる小説作法の素地となったと言えるだろう。

注

本稿は2004年11月3日京都女子大学英文学会大会において口頭発表した原稿を大幅に書き直したものである。

1．Camfield によれば、「1か月300～400ドルという賃金は・・・戦前のミシシッピ川の上流で典型的な労働者の収入の約12倍とされる」。更に注目すべきは、1850年に熟練労働者とそうでない者の差はわずか2：1であったが、1880年までにはそれが6：1になったことである。(114)

2．John McComb は、サンフランシスコ『アルタ・カリフォルニア』San Francisco *Alta California* の経営者でトウェインの友人だった。

引証資料

"An Exchange of Prisoners." *Harper's Weekly,* January 3, 1863. 7.

Camfield, Gregg. "A Republican Artisan in the Court of King Capital: Mark Twain

and Commerce." *A Historical Guide to Mark Twain*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. Oxford: Oxford UP, 2002. 95-126.

Lauber, John. *The Making of Mark Twain*. New York: American Heritage, 1985.

Mattson, J. Stanley. "Mark Twain on War and Peace: The Missouri Rebel and 'The Campaign that Failed'." *Mark Twain Critical Assessments*. Ed. Hutchinson, Stuart. Mountfield, East Sussex: Helm, 1993.

Paine, Albert Bigelow. *A Biography*. New York: Gabriel Wells, 1892.

Twain, Mark. "Lucretia Smith's Soldier." *Early Tales & Sketches,* Vol. 2. Berkeley: U of California P, 1981. 125-133.

———. *Mark Twain's Letters*, Vol. 1. Berkeley: U of California P, 1988.

———. "The Private History of a Campaign That Failed." *The American Claimant and Other Stories and Sketches*. New York: Gabriel Wells, 1892. 255-282.